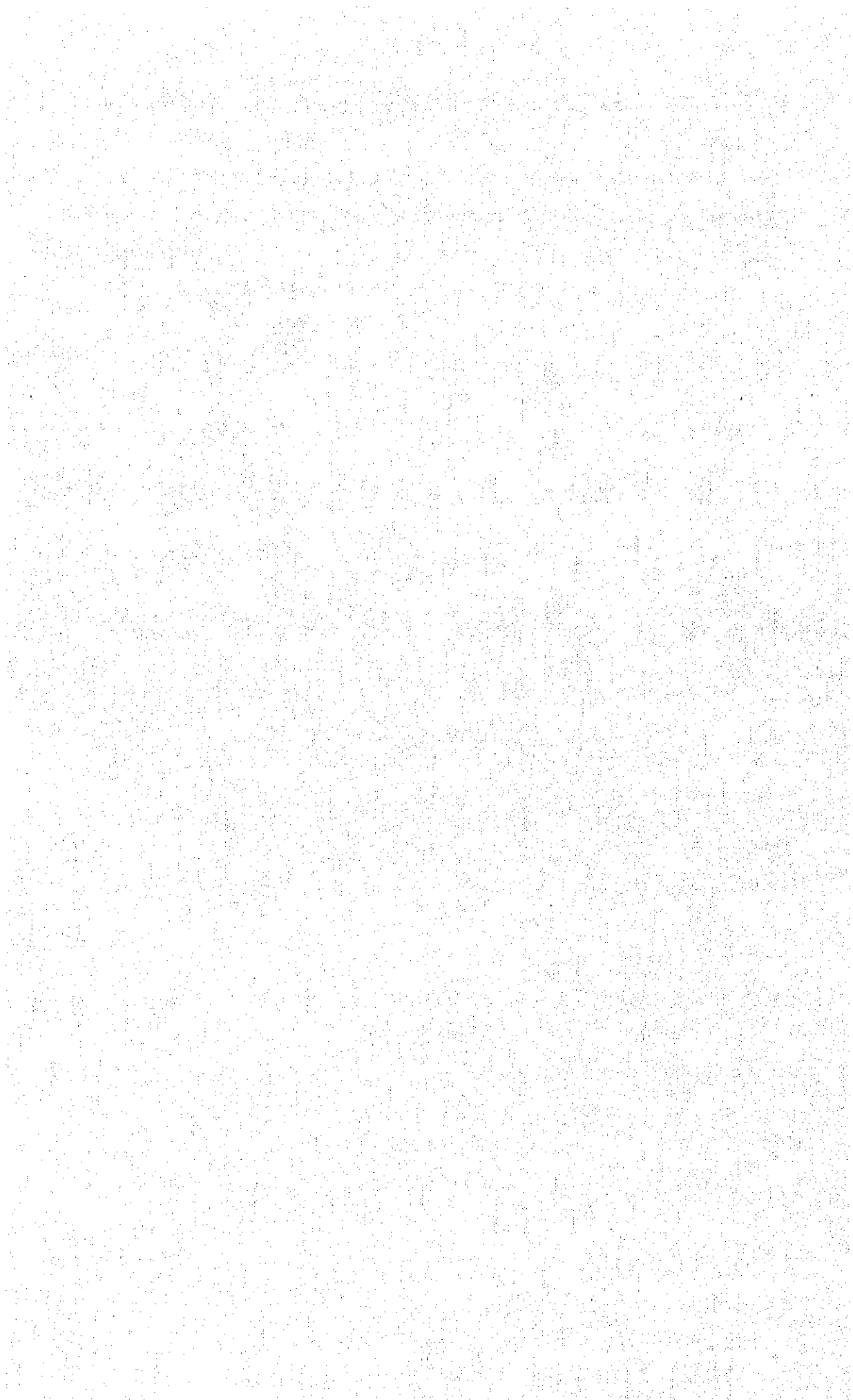


—

般



番号	文 献 名	刊 行		整理番号	
		部 課	日付	資料室	農計部
1	Etude socio-économique de la zone du lac Horo et des mares de Niafunke et de Dire, Tome 1-1 ^{er} partie : description de la zone et propositions opérationnelles	マリ生産省	72.4	519 80 M D01187	-
2	Tarif des prix de vente des matériels et produits	マリ財務商業省	77.10	519 83.3 M D08933	-
3	マリ共和国経済協力調査報告書	社計画	77.12	519 36 SDP 03327	516 77-1
4	マリ共和国について	外務省 他	78.1	-	516 78-1
5	マリ共和国経済社会開発5ヶ年計画(1974~1977年)	社会 開 発	78.2	519 34 SD 03279	516 78-3
△6	マリ共和国, 1つの人民, 1つの目的, 1つの誓い	?	79.2	-	516 79-2
7	Fiche de projet : Projet de développement intégré de la zone Lacustre	マリ農村開発省	79.2	519 83 M D08920	-
8	Marchés Tropicaux et Méditerranéens -Mali 1980	雑 誌	79.12	-	516 80-2

(註) △印は, 登録はあるが調査の際見当たらないもの。

Etude socio-économique de la zone du lac Horo et des mares de Niafunke et de Dire (ホロ湖及びニアフンケ及びディレ沼沢地帯の社会経済調査) Tome 1 - 1^{er} Partie (第1巻, 第1部)
(47.4 - 生産省 - 519 - 80 - M - D01187, 230P)

1. 仏文。本資料は、第1巻第1部、地帯概況及び事業の提言の部である。

2. 目次

1. 基本データ

1.1 物理データ

1.2 人口データ

1.3 土地制度

1.4 環境と普及実施体制

2. 経済活動

2.1 農業活動

2.2 畜産

2.3 漁業

2.4 工芸

2.5 流通ルート

3. 生産の単位

3.1 調査地帯に現存する農業生産の一般状況の概要

3.2 生産単位の型

3.3 事業の結論

4. 事業の見通し

4.1 事業的関与の範囲

4.2 関与の方向づけ

4.3 関与の方式

附属資料

3. 結論部分に、水利改良、農地改革、行政改善が必要だとしている。

Tarif des prix de vente des matériels et produits (原料
及び製品販売価格の表) (52.10—マリ政府財務商業省—519—83.8—
M—D08933, 40P)

1. 仏文。78/79年の価格表。
2. 農業生産資機材のパマコにおける価格表
 - 1) 使用中の完成品
 - 2) 農 薬
 - 3) 肥 料
 - 4) 取替部品
 - 5) 機械部品, 作業機等の価格が, 型式ごとに掲げてある。

マリ共和国経済協力調査報告書(52.12—国際協力事業団—519—36—
SDP—03327, 75P)

1. 経 緯：

昭和51年6月マリの工業開発大臣来日の際、経済協力案件の要請があったので、現地調査を行った。

2. 日程及び団員：

1) 日 程：昭和52年10月8～15日

2) 団 員：久保田 穰(団長)，堀江副武(以上外務省)，丹沢嘉夫(通産省)，
佐伯嘉彦，杉山亨造(以上JICA)，河野善彦(OECF)，沖
本精一(在セネガル大使館)

3. 要 約：

1) 第1章 マリの概要，第2章 日本との関係，第3章 マリ経済の概要と現
行5ヶ年計画，第4章 外国援助の概要，及び資料編から成る。

2) 第3章第1節 経済の概要に，次の記述がある。

農業国であるが，灌漑地は少く，旱害で大被害を受けること，
穀作は，粟，ソルガム，トウモロコシ，米等，商品作物はワタ，落花生であ
るが収量は低いこと，

耕地 1,600千ha，牧用地 30,000千ha等の数字
等の記述がある。(註)粟は，おそらくトウジンビエかと思われる。本調査に
は農業関係者が参加していない。

3) 第3章第4節セクター別開発計画の現状のiiに農業の記述がある。

(1) 11°～16°Nはサバンナ，17°N以北は砂漠，その中間はサヘルである。

降雨は6～10月の間に，サバンナで700～1,000mm，サヘルで300～
600mm，4～5月は40℃をこえ，12～2月は涼しい。夜間15～18℃
となる。

(2) 労働人口の85%以上が農牧に従事，上記の穀物をつくる。

栽培180万ha，生産約100万トン前後。48年は旱害で76万トンに減少
した。

米(水稻)はニジェール河流域中心に20万ha，17～20万トンの生産が
ある。

落花生は7万トンの輸出がある。

(3) 農業開発には，

イ、穀物の優先生産，ロ、灌漑栽培の促進，ハ、農業，畜産の研究開発，ニ、牧畜の再建，ホ、水資源の優先開発（とくに米需要の急増が見込まれる。）等の記述がある。

4) 同章第4節のⅢに水資源開発についての記述がある。

河川利用と地下水開発が重点にあげてある。

また、地下水開発協力要請の訳が掲げてある。

5) 第4章に各国の援助の一覧表がある。

マリ共和国について(53.1—外務省ほか—農計部番号516—78—1)

1. 外務省中近東アフリカ局アフリカ課作成, 53.1付, 「マリ共和国(République du Mali)について」というパンフレットのコピー, 11P, カネマツ江商作成の手書き報告「マリ共和国概観」, 29P, 及びアフリカ開発協会作成「サヘル4ヶ国(西アフリカ)干魃地域調査(50.3)の部分的コピー」の3資料が, 綴込まれている。
2. 「マリ共和国について」:
マリの概要。農業については, (1) 経済の基本である。(2) 国内総生産の50%。(3) 粟(註—多分トウジンビエ), ソルガム, 米, とうもろこし, 落花生, 綿花が生産される。(4) 牧畜は, 牛520万頭, 羊・山羊1,000万頭, 等の記事がある。
72~73年の干魃で農・牧とも大被害をうけたとある。
3. 「マリ共和国概観」:
ほとんど上記と同内容。開発5ヶ年計画('74~'78)は, 7.7億ドルで, 畜産, 河川漁業, 農業, 教育, 交通網を重点とすることが記されている。
4. 「サヘル4ヶ国(西アフリカ)干魃地域調査」:
 - 1) 日本工営大沼氏らの49年11月~12月の調査報告。
 - 2) オートボルタ, ニジェール, マリ, 及びセネガルが対象。
 - 3) 本コピーはマリ共和国分のみの部分コピーである。
 - 4) 農業については, 次の記載がある。
 - (1) ミレット, ソルガムが主要。早害で, 大減産した。75→5.0万トン。
 - (2) 水稻栽培は192千ha, 半分はニジェール川のInter Delta地帯にある。その他ニジェール川, セネガル川流域にある。早害で減産した。
 - (3) メイズ, 豆, そさい, Manges等の記述がある。
 - (4) 綿花と落花生は重要換金作物。
 - (5) 家畜は重要だが早害を甚しくうけた。
 - 5) 日本への要望にはニジェール川開発。生産省は援助による灌漑をあげている。

マリ共和国経済社会開発5ヶ年計画(1974~1978)(5.3.2_社会開発協力部_519_34_SD_03279, 67P)

1. 序言等がなく、資料の由来は明らかでないが、別途報告書「マリ共和国経済協力調査報告書(5.2.12_国際協力事業団_519_36_SDP_03327)」に、現行5ヶ年計画を仮訳したとあるので、同報告書の付属資料と思われる。

2. 第I部 経済的性格および状況、開発目的および戦略

第1章 マリ経済の全般的性格ならびに5ヶ年計画にあたっての特殊事情

第2章 長期開発の目的と戦略

第3章 5ヶ年計画の目的と戦略

第4章 1978年末までの半全体的な予想

第II部 農村経済の開発

第1章 農業資源の開発

(註) 第2章以下はなく、元来ないのか、省略したのか不明。

第III部 第二次産業部門(鉱業, エネルギー, 水, 工業)

第1章 鉱物資源の開発

第2章 水資源およびエネルギー生産の開発

第2節 地下水資源と田園の水

8 農村部の水利開発研究

9 井戸作成

11 モブティの農村部およびその他の飼養プロジェクトに対する井戸プログラム

という内容である。

3. 第I部の農業関係記事

1) 土地: 全面積 124 百万ヘクタール

耕地 1.6 百万ヘクタール

休耕地 9.4 "

保存林 1.1 "

動物保存地 3.3 "

牧場 30.0 "

その他 4.6 "

} 50.0 百万ヘクタール
(利用面積か?)

半分以上は砂漠と準砂漠で降雨量 200 mm 以下, 200 ~ 1,500 mm はステップとサバンナ。

サバンナは農業に利用される。

- 2) 水資源：地表水は、主として、ニジェール川およびセネガル川。
- 3) 伝統的農法が低収をもたらしている。
- 4) 農業が圧倒的優位を占める。気候に左右される。

食糧生産の停滞と、賃耕増加の割に成長が鈍いことが見られる。

ha 当り収量は低下している。

粟(トウジンビエ?)	1960年	750 Kg
	1972年	700 "
とうもろこし	1960年	1,000 "
	1972年	800 "
米	1960年	1,000 "
	1972年	900 "

- 5) 食糧生産の増加は、面積増に依存している。
- 6) 最近10年では、綿花、落花生が(輸出用)増加している。
- 7) 全体では需要を充すが、(1人当り穀物消費165 Kg)地域により産出はかなり異なる。
- 8) 3ヶ年計画中に、大旱害を受けた。

理由は、

(1) 雨が少く、且つ、地域が編った。(2) ニジェール川、セネガル川の長期水量不足、(3) 地下水低下により、井戸の増設不能、(4) 水管理の欠陥である。

'72/'73年に穀物は40万トン減産した。家畜は30%減少した。漁獲も減った。

栄養、衛生にも影響した。農牧民は負債整理ができず脱出者がふえた。

- 9) 以下、5ヶ年計画中の位置付けの記事がある。

4. 第II部の農業関係記事

- 1) 人口は'74年、5,691千人、2,000年には、10,000千人と想定。

'78年には、6,332千人としている。

- 2) 穀物消費を5ヶ年計画末に、181 Kg/年/人とする。
- 3) 米がぜい沢品として登場、次第に一般化する。
- 4) 灌漑の発展で米を自家消費するようになる。
- 5) 備蓄：毎年、国の需要の10%(80%は農民、残りは村、地域)
- 6) 自給を確保し、公平に配分する。
- 7) 78/79年の目標

粟・とうもろこし・小麦 1,189,000 t (330,000 t 増)

粃 330,000 t (136,000 t 増)

毎年 70,000 t を備蓄。

8) 寡雨地帯では，耕種改善，イナゴ防除。

9) 水田地帯では，集約栽培の実験。及び拡大，このための灌漑増強を行う。

Fiche de projet : Projet de développement intégré la zone Lacustre (ラクストル地帯総合開発計画のFiche(54.2—農村開発省農村経済研究所—519—83—M—D08920, 8P))

1. 仏文。
2. 本計画は、ニジェール河流域の lacustre 地帯における穀物開発を目的とする。
3. 現状について
 - 1) 現在は、天水栽培 (Pastèque スイカ, Pénicillaire ?, 施肥稲作)
洪水栽培 (浮稲)
減水時栽培 (Pénicillaire, ソルガム, トウモロコシ, バレイショ, ニエベ)
灌漑栽培 (小麦, ソルガム, バレイショ, 野菜)
が行われている。
 - 2) 灌漑栽培と減水時栽培による安全な栽培。畜産, 漁業。が主要なポテンシャルティーである。
4. 施設について, 2つのコースが検討された。うち, Korientza-Tonka ルートは3~5年以内に実現可能である。
施設としては, 水路整備が中心である。
Kessou-Killy 及び Diré 平野の 1,500 ha, 沼地 15,000 ha, Horo 湖の改良 13,000 ha 等が考えられる。約 10,000 ha を計画する。
5. 水路整備による農業改善, 畜産, 林業, 農産加工を導入する。
等の内容が盛り込まれている。

Marchés Tropicaux et Méditerranéens — Mali 1980 (54.12
— Marchés Tropicaux et Méditerranéens — 農計部番号 516 —
80 — 2, 87P)

1. 標記雑誌の英語版のマリ特集号である。

2. 目次の要点：

序 言

1 要約データ

2 マリの経済・社会政策の基本方針

3 目標と方法

4 財政政策と状況

5 経済状態

結 論

附 録

3. 5 経済状態の章は、次の構成である。

生産基盤

マリの生産

第1次生産

農 業

牧 畜

漁 業

林 業

第2次生産(略)

第3次生産(略)

4. 第5章の要点

1) 第1次生産は総生産の45.15%を占める。

2) 第1次生産中、農業が53.4%(主穀36%, 工芸作物17.4%)

牧畜, 漁業, 林業が46.6%

3) 食料自給及び余剰農産物輸出を目指し、'72～'78の開発計画を行っている。

計画の土地利用は、国土123百万ha, 耕地1.6百万ha, 休閑地9.4百万ha, 林地1.1百万ha, 牧野30百万ha, 砂漠74百万ha等が表示してある。

4) 米：ニジェール河事務所の統括下で、事業を実施中。

5) 園芸作物：都市の需要充足(生野菜), 農村缶詰工場への供給, 少量の欧州

又は象牙海岸への輸出のため、上流地域、バギンダ、ドゴン等の計画がある。

6) 工芸作物：綿、落花生、タバコ、ダー（dah）等の重視。

7) 1978/79 の実生産高は、

マイロ、ソルガム、とうもろこし	1,006,000 t	89%
米	270,000 t	77%
落花生	125,000 t	55%
綿	130,000 t	90%

とある。計画の数量の55～90%（上表右欄）であった。

8) 主穀は生産が需要を充てていない。マイロ、ソルガム、とうもろこしは大部分自家消費である。

米はほとんど都市での消費である。

9) 農産物生産ポテンシャルは大きい。

10) 工芸作物では、綿、落花生、さとうきび（新有望作物）、茶、タバコの説明がある。

11) 畜産は、米国、フランス、国連等の援助をのべている。

12) 漁業はMoptiの計画が多少有望だが停滞している。

13) 林業はIDAの援助の記述がある。

5. 第1章に、気象、土壌、水等の記述がある。

6. 全体として、貴重な資料。

JICA